順正寺報　第六号

'91.

報恩講御案内

秋冷の候、皆々様には御健勝にお過ごしのことと存じます。

さて、例年の通り『報恩講法話』を左記により厳修致します。

宗祖『親鸞聖人』の徳をたたえ、念仏相続の御先祖の御陰を偲びお勤めする大切な行事です。

皆様お誘い合せて、万障繰合せの上御参詣下さい。

記

十一月十日（日）

午后一時より

読経（衆僧供養）

法話（副住職『節段説教』に初挑戦！）

おとき　以上

順正寺　住職

江口貫照

『報恩講』について

『報恩講』というのは、親鸞聖人の御恩に報いるというところからスタートしているのですが、「恩に報いる」という事は、「恩」を実感しなければ「報いる」という行動は起きてこないのです。

今の世の中では全て自我が優先して、人様の御恩、親兄弟から受けた恩に気が付く人は少ないようです。「恩」という感覚は自らを見詰めるところからスタートする。「誰かから何かをされた」というところからスタートしていては恩を感じる事は出来ない。自分の中にある、生命、肉体、自分の全てをじっくりと見詰め直す。そうするとその中に親から受けたもの、周りの人々から頂いた、色々な思い、知識、文化、そういうものが見えてくるはずです。それを取り入れ、受け入れたのは、「私」かもしれない。が、それを「取り入れ、受け入れてくれ」という願いがあって、始めてこちらが受けられるのである。自分が賢いから「それ」を受け入れられたなどと思ったら大きな間違いである。

小さな子供が父母を、「お父さん、お母さん」「パパ、ママ」と呼ぶ時、その呼び声は、「パパと呼んでほしい、ママと呼んでほしい」という親の願いがあって、初めて出てくるのです。自分から、賢く、気が付き、「パパ、ママ」と呼んでいる赤ん坊などいやしないのです。

スタート・ラインを見て下さい。そうすると、自分に、「お父さん、お母さん」と呼ぶことを教えてくれた親の恩がそこにある。「呼んでほしい」という『親の願い』があって、始めて「パパ、ママ」と呼べるのです。

そういう所に気が付けば、『恩に報いる』という事が解ってもらえると思います。

住職

『初めて仏様と出会ったのは何時かなぁ』

江口久子

のんの、のゝさま
　仏さま　私のすきな父さまの
お掌々の様に、しっかりと
　だかれてみたい、仏さま。

随分昔のこととなった。昔々、私がまだ二十代前半の頃、或る仏教保育園に保母として勤務していた時代、毎日、朝礼の時、必ず幼児たちと合掌しながらうたった、讃仏歌である。園児達は無論の事、教える側の私自身でさえ、只、カリキュラムの一環として、別に何の不思議も感じずピアノを弾いて、歌っていた。そして、年間を通してのカリキュラムの中の、「花まつり」「成道会」（お釈迦様が悟りを開かれたことを感謝する機会）と言う行事をお遊戯会として行い、各クラスの先生たちが一生懸命、自分のクラスは何を子供達にさせるか仏さまとは関係なく考え、結果を楽しみにしていた。私自身、仏とも法とも意識して居なかった。そんな私が「何故？」と思ったものだ。仏縁に結ばれる不思議は、まことに、計らずして御縁を頂いたとしか思えない。　小学校三年生の時に父と死別し、その時に本当なら仏様と出会っていたはずである。が、私には稚心に、寺に対し、僧侶に対し或る種の悲しい想い出しかなく、「お坊さんも、お寺も、大嫌い！」と、そういう意識を持ち過ごしていた。故に、昼間は職業として仏教保育園で過ごし、毎日曜日にはキリスト教会に礼拝に通っていた。神父さまは非常に優しく、私の心を癒して下さる。又、心に浸み入る教えを説いて下さり、当時の私には本当に心安まる場であった。

そのうちに、「洗礼を受けるように」「こちらの幼稚園にきてほしい」と、行く度に言われるように成った。そうなると考えてしまう。私は本当に神様を信じられ、神様は救って下されるのだろうかと。そして、よくよく考えて、どうしても洗礼を受ける気持ちになれず、行き辛くなり、以後、教会へは行かなくなった。ちなみに、妹は修道尼と成って現在バチカンに居る。同じように教会に通って居ても、「御縁がないということはこうしたことか」と、しみじみ思う。

そんな私がそれなのに何故、仏縁に巡り合わせていただく身となったのかと思う時、やはり、父の死と関係なくして考えられない。父の死を縁に、気付かずにいるうちに仏さまと向かい合っていたのだと思う。ただ、その時の私は気付かず見過ごして居たのだと思う。

そして、あれ程、寺に対し、僧侶に対しけっして良

い感情を抱いて居なかった私が、住職に出会い、住職の母に、兄弟に出会ったことで、それまで持っていた認識との余りの異なり様にビックリさせられ、又、仏さまに見守られている自分であるということに気付かせて頂けた。

五十を遥かに越えた今、学問的理論・理屈は何も解らないが、只々、何を機に仏縁に会わせていただいたのか、又、会っているはずなのに、気付かず見過ごしてしまっていることの悲しみを痛感している。

『のゝさまに　上げましょ　きれいなお華
　のゝさまに　上げましょ　きれいなお水』

これも仏教讃歌である。他の童謡は忘れているのに、不思議なことに先の歌と同様、忘れることのなかった歌である。「忘れえぬ歌」、このことも、私にとって、よくよくの仏縁と味合わせて頂いている。

この道は、決して自分で決めたものではなく、仏さまの『御計りごと』としか思えない。

住職は常に、「寺に住むという事とは、自分たちは特別な存在なのだと思うことが大きな間違いで、世の中の誰よりも業が深いため、だからこそ、如来様のお給仕役を務めさせていただいているという事なのだ」と、私に言う。心静かに考えると、本当に言われる通りの私である。こんな私を今日まで育てて下さった、今は亡き京都の母。夫である住職。私にとっては誰よりも大切な『善知識』（自分を正しい道……念仏道に誘い、導いてくれた人）である。沢山の御門徒の方々は、私にとってどんな立派な先生方のお話より、私の師であると信じている。草庵のようなこの順正寺であるが、訪ねて下さる方々は私にとって、仏様のお使いと思うと、仏恩報謝の念が一入感謝されるのである。

母の晩年、最後に会って別れるとき、この私に言ってくれた、「久子サン、お浄土で会おうナ。お浄土で待って居るエ。」と。私は、再びあの母に会うためにも、これからも、生きていかなければならない、その様に導かれていくのだと心に誓った。そして、あれから五年、今も尚、心の内に母は生きていてくれている。

私が仏様と出会えたのは、遠くは父の死、お浄土で待ってる母、そして、本当に仏さまと直面する御縁を結ばせてくれたのは、他ならぬ住職の御陰である。

『小慈小悲もなき身にて
　有情利益は思うまじ
　如来の願船いまさずば
　苦海をいかでか渡るべし』

（正像末和讃　愚禿悲歎述懐より）以　上

投稿コーナー！

※よわいかさね　ちぎり絵にみる　楽しさや

※喜寿迎え　元気に暮らす　ありがたさ

※香りはなつ　婿の贈り物　紅梅かな

※夕立や　すずかぜよびて　ゆうげの膳

※靖国に　弟しのび　桜見かな

（瓜生　一枝）

※遠きあの子を思ひつつ
　流れ行く川の流れよ
　我が思ひをのせて　メキシコへ

※大慈悲に守られどうしのこの私
　お念佛となへるほかはなし

※心のこもるおにぎりの
　味のうまさに　舌づつみ

（大和田　マサ）

※旅に行って　次は何処へ行こうかな

（江口　貫正）

速報！

・さる10月25日、初めての旅行会が執り行なわれました。30名で茨城の親鸞聖人御旧跡を巡り、楽しく一日を過ごしました。来年も予定しています。乞う御期待！

「白色白光の会」御案内

十一月の「白色白光の会」は、左記の通り執り行ないます。

記

◎日時・十一月二十日（水）午后一時ヨリ

◎会処・順正寺本堂

新規会員も随時募集しております。

詳しくは当寺までお問い合わせ下さい。

高村光太郎の代表的な詩に「道程」という作品が有る。『ぼくの前に道はない　ぼくの後に道は出来る…』こういう出だしで始まる詩がある。自分の道は自分で切り開いていく、行けども行けども何も見えぬ、だからこそ苦しみながらも歩み続ける。或る意味では、個個の心情を代弁してくれている。一人一人の歩む道は、皆各々違う。だからこそ、人が人を知ることは非常に困難なのである。しかし、自分の歩いてきた道を振り返って見る、無数の足跡により均されている。手探りしながら、必死にその道をこちらへ進んでくる人もいる。自分の前にも道はあるはずだ……でも、見えない。只、その道を見ようとすることぐらいなら出来そうだ。まだ無いとしか思えない、そんな道に感謝。　合掌

〒177東京都練馬区石神井町三の十七の四
☎03（3996）2064
順正寺